第４回高知県社会教育委員会会議概要

令和６年３月 11 日（月）14:00～16:00
高知県立塩見記念青少年プラザ　5F 多目的室
出席委員（川上確也、久寿久美子、岩井拓史
徳増千里、佐竹真紀、眞鍋大輔
森岡千晴、吉田友一、斉藤雅洋
松田弥花）

１　開会（14:03～14:05）

（委員長）

本日も、前回に引き続き「これからの社会教育と若者世代」について議論を深めていく。本日は、「若者にどんな環境（活躍の場・機会）があるとよいか？」という小テーマのもと、３名の委員よりそれぞれの立場から提言をいただく。活発な質疑、意見交換を期待する。

２　議事（14:05～16:00）

【私の提言】

（委員１）

若者にどんな活動の場・機会があるとよいかについて、自分が社会教育団体である青年団の活動を通じて感じたことを述べたいと思う。

青年団とは、2014 年から約 10 年間関わり、地域活動を行ってきた。初めは『団』とついていたことから怪しく思い、同級生の誘いを断っていたが、あることがきっかけで活動することになった。今は地元の青年団や県の青年団、大学生と一緒に合唱や演劇に取り組んでいる。

高知県青年団協議会は、55 年の歴史があり、前身の団体からは 70 年近くになる。発足当初は、300 団体、8,000 人が会員となり、県内各地域に青年団があり、それぞれの地域でお祭りや地域行事のほとんどに関わっていたと聞いている。その青年団を経験した世代が、PTA や婦人会に入り、地域で活動するということが続いていた。先輩の中には今は議員をしている方や「ごっくん馬路村」で有名な方などもいる。

現在は、県内 11 団体、会員数 200 人まで減っている。しかし、高知県はこの５、６年、社会教育は大事だと感じたメンバーがあの手この手を使い、様々な交流会や行事を企画し、若者にきっかけづくりを行い、少しずつ若者の中に芽が出始めている。そこで、若者にどんな活動の場や機会が必要であるかについて感じていることを三つに絞って発表する。

①定期的・継続した「あつまる！」場

私たち若者の中には、高校を卒業して大学生になったメンバーもいるが、人と関わる場が思った以上に少ない。特に同じ職場以外や世代を超えたコミュニケーションの場がないと感じることがあった。

なぜ、定期的、継続した場が必要なのか。

今、地元の青年団では青年団や地域おこし協力隊、専門学校に来られている留学生等が集まり、ソフトバレーを行っている。定期的に行うことで徐々に仲良くなり、人となりも分かりだし、触れあい、つながりができたことで相談事ができたり恋愛も始まったりしている。これまでは、外国の方がいるなと思うだけで人に興味を持つこともなかった。毎回、体育館を予約し、鍵を開け、仕事の疲れもある中、19 時から 21 時まで体を動かし、しんどさを感

じることもあったが、人と人のつながりが見られるようになると段々やりがいを感じるようになってきた。改めて定期的に継続して集まる場が大事だと感じている。また、今の若者は人間力につながる報告・連絡・相談という当たり前のことができないという現状がある。しかし、人とつながることで責任感が生まれ、報連相ができるようになる場にもなっている。

②世代を超えた・後輩世代も一緒になった「きっかけ」の場

地域活動をするといった人が行動に移す原動力は、心が動くこと、心に響くこと、ひらめいたりときめいたりすることが関心の源であり、原動力になっている。これは、人とつながるからこそ生まれるものである。高校生がボランティア活動を行う「なつボラ」を一緒に行ったとき、高校生は履歴書に書けるから、単位が必要だからといったある意味不純な動機もあった。しかし、「やってみたら意外と楽しかった」と感想をいただいた。こういった「やってみたら…」という場は大事だと思っており、「好きだから」だけではなく、そういった現場の場づくりも必要だと感じている。青年団の中にも「この子たちにかっこ悪い姿は見せたくない」と奮起するメンバーもいる。そして、高校生と活動を継続していると、最近では、卒業した子どもがスムーズに青年団の活動に参加してくれている。学校教育の中に社会教育とのコラボというものがあると、自然に地域活動に入れ、PTA や婦人会の活動にもつながるのではないか思う。

③イキイキできる「環境」

若者が活動するときの環境に関して、若者だけでは難しい面がある。県内各地には様々なサークルがある。スポーツも活発に行われている。青年団には、世代を超えた人たちとつながることを大事にしようという目的がある。

まず、大人と関わることで OB・OG、行政を含め経済的な面でサポートしていただいている。ありがたく思っている。そして、環境のサポートとして、きっかけをいただくことは大変ありがたく思っている。我々若者が単独の公演を打つとなると難しいところがある。しかし、公民館の大会とか成人式への依頼があると入ることができる。地元の若者と青年団が一緒になり活動できる環境づくりをしていただいている。諦めない大人、向き合ってくれる大人がいるありがたさを感じている。東日本大震災から大学生とずっと続けているよさこい踊りで東北に元気を届けようという取組は 11 年ほど続いている。彼らと向き合うことで私たち青年団も鍛えられている。報告・連絡・相談ができなかった学生が、徐々に成長し、リーダーとなり、社会人 1 年目、2 年目に生かされたと言う。目的ややりがいを見失わないようにサポートできるということもあきらめないの中には含まれていると思っている。

以前、好きなことを好きなようにやることはいいが、地域との接点や目的をどう考えたらいいかと言われたことがある。自由に楽しく、楽に、自分たちがやりたいようにという楽しさはあってもいいと思うが、目的とどうつながっているのか、何を達成したらやりがいにつながるか、地域にとってはどうなのかということを考えられることをサポートできるのが社会教育団体のいいところなのではないかと思っている。なぜそれが大事かというと、ただ楽しいだけの楽しさよりも、みんなでやりきったという楽しさとやりがいが合わ

さった楽しさの方が楽しかった、やりがいがあったと私は思える。これをみんなで味わっていくことができれば、その人にとってもまたやってみたいという思いにつながるのではないかと思っている。

青年世代・団体として自分たちは、今後、その現場のつなぎ役を担いたいと思っている。高校生と地域の方のつなぎ役や移住してきた方と地域の方とのつなぎ役という、今の若者世代としてはつなぎ役が一番できるのではないかと思っている。よさこい祭りのボランティアのバイトでも高校生と大人だけではお互いの本音が言い合えなかったり、ちょっとしたことでトラブルになったりしたことがあった。そのつなぎ役が若者世代なりにできるのではないかと思っている。これが自分のやりがいにもつながっているので、今後も続けていきたいと思う。

今のこのつながりが薄いと言われる時代だからこそ、人とのコミュニケーションや人のぬくもり、社会教育が大事だと痛感している。ここにおられる皆さんともつながり連携できたらいいなと思っている。

（委員２）

2021 年 12 月に移住し、2 年が過ぎた。新潟県で生まれ、大学生の時に特撮ドラマに出演、これがバックグラウンドにある。幼少期に虚弱体質だったこともあり医療系の大学に進み、最終学歴は大学院医学系研究科を修了、所属する学会は日本東洋医学会と日本高血圧学会、鍼灸の国家資格を持っている。

自分の人生を三つのステージに分け、紹介する。

１.特撮ステージ

21 歳、大学 3 年生の終わりから特撮ドラマに参加。1 話完結型の TV ドラマであった。夏には劇場版の映画、年末年始も撮影があり 1 年 365 日毎日撮影があった。

２.鍼灸ステージ

初期研修を 2 年間、沖縄県の離島で行った。初期研修が終わった後は、島根大学医学部病態病理学（大学院）で SHRSP※の研究をしていた。現在は、一般社団法人　出雲漢方研究会に所属し、島根県出雲市の医師を中心とした大学発の医療コミュニティの形成、島根大学医学部や附属病院との連携、クリニック・鍼灸院の運営等を行っている。2028 年にはヘルスケア事業・湯治場ツーリズムを開設する予定。実際の活動としては、京都と東京にある漢方クリニックで施術を行っている。

※SHRSP（脳卒中易発性高血圧ラット）：急激かつ高度な高血圧進展に伴う心血管系疾患の病態モデル

３.行政ステージ

高知市の地域おこし学校の運営と管理を行っている。他にも、中学校でキャリア教育に関わる講演、高知県立大学の学生を受け入れて地域学実習として特別講師などを行っている。また、高知市の広報誌の取材に同行するなど様々なことをしている。

高知市地域おこし協力隊の業務内容は、高知市沿岸部の振興である。高知市沿岸地域は、市内でも特に高齢化・人口減少等の課題が深刻化している地域であり、そこに外からの移

住者が入りこんで活性化を図るというのが目的である。

令和４年度には、「災害に備える！キャンプで使える！防災アウトドア入門」と銘打ち企画・運営した。これは、内容的に小難しい市民学校を行っても人は集まらないこともあり、キャンプを学ぶことで災害（有事）の際に役立つことを学ぶ教室である。他にも地域の清掃活動も企画したが、これには約 70 名の参加があり、多くの住民との交流を図ることができた。

私がこれまでのバックグラウンドを生かしてどのような活動をしているか紹介する。私は大学時代、中山間地域における社会的処方の実践というテーマを研究してきた。標準的な処方なら病院で「この薬飲んで」と処方箋を出され、診察は終わり。場合によっては経過観察で再来院するという流れなのだが、社会的処方とは、患者の健康面に加えて社会生活面の課題にも目を向けるというところが特異的なものである。薬の処方だけでなく、患者が体操や音楽に興味があったり、ボランティア活動が好きだなどと問診等で分かれば、医師が地域とのつながりを考え、参加すべきサークル活動を紹介するということを大事にするといったものである。薬と同じように「社会とのつながり」を処方するところからこのように言う。発祥はイギリスで 2018 年に制度化された。日本でも近年言われるようになってきている。

この社会的処方を私の担当地域で実践するには、自分事→地域→特徴→想い→理想のサイクルを回すことによって地域に還元することができるという大学での学びを生かし、今の自分に落とし込むと、大学時代の研究生活を活かしたい（自分事）→地域にコミュニティスペースが少ない（地域）→フットワークの軽い協力隊が動きやすい（特徴）→何かをつくれば、人が面白がって集まる（想い）→話題になる・人が人を呼ぶ（理想）というところに着地すればいいのではないかと考えた。そこで、兵庫県豊岡市で展開されている「YATAI CAFE」という先行事例を持ってきた。これは、「モバイル屋台 de 健康カフェ」とも言い、医者や看護師など医療従事者が医療従事者とは言わずに小さな屋台を引いて街を歩き、コーヒーやお茶を振る舞いながら気軽に健康の話をするところまでもっていく。偶発的に出会って話が弾む中で、医者や看護師であることを明かす。青空の下で気軽な健康相談ができるというのが目的の活動である。普段の病院やクリニックの診察室では、緊迫した場面となり患者は言いたいことが言えないので、我々医療者が外に出て行き、出会うきっかけをつくるのである。これが社会的処方の実践例で、いわゆる小規模な公共空間をつくることで住民の思いや課題を聴集するというねらいがある。

この事例を私の担当地域で取り入れた。まずは、屋台をつくるところから住民と一緒に考えた。図面引き、チラシ作成、建築事務所に依頼し資材調達、受講生募集（平均年齢 45 歳の 20 名が集まる）、仮組み、本番、アンケートまとめと活動を進めた。本番当日は、地区をみんなで屋台を引くことができた。

もう一つ、特別な活動として、特撮ドラマが放送されてから今年で 20 周年を迎えることを記念して映画を作ることになり、通常の関東、東京での撮影ではなく、自分が行政にいることもあり高知市の特別協力を仰いで高知で撮ることになった。制作のはじまりは、高知大学の学園祭で、学生と一緒に地方とＵターン、Ｉターンを考えるというディスカッシ

ョンした際に「高知で映画撮影をすれば盛り上がるのではないか」という建設的な意見があり、制作会社と高知市にプレゼンをし、何とか熱意が通じ高知ロケを敢行することができた。このとき何が大事なのか。まちの魅力や認知度の向上、地域に対する誇りや愛着心を創出する（シビックプライドの醸成）ことができるのではないかと考える。スタッフや出演者が総勢約 70～100 名が関わることになり、長期ロケ滞在による宿泊施設や周辺の飲食店の賑わいを創出することができる。映画作品一つで人の流れを変えたり増やしたりするというのが目的の一つである。映画を撮って終わりではなく、聖地化プロジェクトを行うなどを考えている。実際、映画×地方創生におけるフィルムツーリズムが考えられる。自治体や商工会議所から組成した地域の実行委員会と連携し、全国で約 40 の自治体が取り組んでいる。

高知市では、自治体クラウドファンディングを企画し、目標を超えるご寄附をいただいた。これは期待の表れだと感じている。いただいたご寄附は、ロケに係る補助やロケ地巡りに係る費用など高知市の観光振興・活性化につなげていきたいと思っている。

Take-home message としては、”一瞬の閃きを大切に”である。高知はやりたいことを実践できる土壌や寛容性が移住者目線からするとあり、一瞬の閃きを大切にしてアイデアを重ねていこうと思っている。

直近の活動としては、自分の専門分野を活かし、ふれあいセンターと高知市総務部文化振興課の主催で「初めてのお灸教室」を行い、市民の健康に寄与している。また、県の観光政策課とジョイントし、JR 大阪駅で映画と高知の宣伝をしてきた。今後も高知県内でも 6 月の映画公開に向けて行っていく。

（委員３）

NPO 法人の活動で子どもの居場所づくりや高知の一人暮らし支援をさせていただいている。今回、若者にどんな環境があるとよいかということで、どんな若者に育んでいくかから地域・保護者の役割まで包括的に話す中で、全体を捉えていると考えていただきたい。

「あなたが人生で大切だと思うものは何ですか」「その大切なものに順位をつけたとき一番にくるものは何ですか」と聞かれて、すぐに答えられる人は少ない。

この世の中で一番価値のあるもの、それは、「時間」だと思っている。時間は「命」そのものである。時間＝命であり、時間をどれだけ使っているか。時間を最も使っているものが自分の中で一番価値のある大切なものである。今、頭の中に浮かんだものとの整合性がとれているかが大切。また、自分の命（時間）なので、どう使うかは自分自身の責任のもと、自分で考えればいいことだが、子どもたちには、授業を受けるときに、つまらなく受けるのか、楽しく受けるのかでは、同じ命を使って生きていて、それを無駄に使うのか、自分のために使うのかは自分次第だと言っている。

人間の価値観は、どこで身につけているのか。それは様々な要因が考えられるが、一番は家庭、家族の価値観であると思う。もしくは学校、友達であろう。それは一緒に過ごす時間が長いからである。どんな物事、感情に触れていくか、どんな体験をしていくかで自分の中の価値観は変わっていく。私は人生の中の「ものさし」と呼んでいる。何かあった場合、自

分がどうしたらいいかは、自分の価値観で測って決めていくことが大事だと思っている。
　また、人には、この価値観と同時に生まれながらに持っている「個性」があると思っている。人が生まれたのには意味があり、そこから芽が出て育てていく過程で、どう育てていくか。それは教育であると思う。

　徳川幕藩体制の熊本肥後藩で、疲弊した藩財政を立て直し、「肥後の鳳凰」と称された６代藩主の細川重賢のことを書いた本の中に、『子どもに教える教育・人づくりとは「木づくり」である。そのためには木配りが大切です。学ぶものはすべて苗木です。それぞれ性格と能力が違います。したがって、その木がなんの木であるかということを見極め、肥料や剪定、添え木などのその木に見合った手当が必要です。その前提となる「なんの木であるか」という見極めが木配りなのです。』とあった。 トマトを植えるとトマトがなる。ナスの種を植えるとナスができる。しかし、子どもの場合は、どんな子どもかは分からない。トマトになるのか、ナスになるのかを見極めながら、そして、日なたと日陰、水上と水下では育ち方が違う。これと同じで、この子にとってどういった環境がいいのかということに気を配ることが重要であると考える。

　もう一つ、アメリカのハーバード大学のデレク・ポック教育学習センターの学長が「教育とは、子どもに問いかけることである。ただ問いかけるのではなく、問いかけ続けることである。しかし、それは、ポストに投函し続けているようなもので読まれるかどうかわからない手紙を出し続けるようなものである。しかし、私たちは教育者として出し続けるのだ」と言われていた。そして、「子どもがなぜ思うようにならないのか、悩む必要はない。ただ、伝えなければいけないことを伝え、まず、問いかけることが大事。「こうしなさい」ではなく、「君は何がしたいんだい？」「何が好きなんだい？」「何に心が動いて感動するんだい？」といったいろんな問いかけをし、子どもに考えてもらうことが大事なのだ。こうした方がいいと思うこともあるが、子どもと接するときには、そこを我慢して「君はどうした方がいいと思う」というようなディスカッションをすることを大事にしている。これは、ポストに投函しているだけなので、子どもは読まないかもしれないが、それはその子どもの人生である。子どもが 20 才、30 才、40 才になったときに、「あのとき先生が投げかけてくれた手紙、何やったかな」と見たときに、「こういうことやったのか」と年相応に分かってくれることもある。」と言われていた。私も同感で、出し続けていこうと思い、今の活動を行っている。
　私は、子どもの居場所として、老人ホームの中で子ども食堂を兼ね備えた場所を作り、活動を始めた。最初は 5，6 人の子どもだったのだが、1 年ぐらい経つと口コミで広がり、50 人～80 人くらい来るようになった。近くの大学生も来てくれるようになった。
　我々は、夢を咲かせる応援団として活動していた。ある時、5 才の子どもに夢を尋ねると「言いたくない。」と言う。なぜ言いたくないのかと聞いてみると、「言うと笑うもん。」と言う。「絶対笑わないから、教えてよ。」と話していると、「社長になりたい」と言ってくれた。おそらく、これまで言うと笑われていたのでしょう。子どもが真剣に話したことを笑われたときの気持ちを考えるとショックを受けた。アメリカの心理学者の研究に「ドリー

ムキラー」というものがある。これは、子どもの夢を潰しているのは、身近にいる大人の場合が多いというものである。一般的な家庭に育った場合、成人するまでに否定的な言葉を平均14万8000回聞かされているという。「○○したい」と言うと、「どうして？」とか「なぜ？」、「そんなことできるわけない」と子どもを思って言っているわけだが、否定的な言葉になっている。けなしたいわけではない。夢を潰したいわけでもない。こんな道もあるよという意味で否定的になってしまうのである。

実際我々も、帯屋町で夢を聞いて歩いて回っていた。全員夢を答えてくれた。小学校へ入る前の子どもの夢は大きい。小学生になると、世界一の○○となる。高校生になると100%職業になる。最終、大人は宝くじに当たること、家のローンを終わらせること、夢がないのか3つしか出てこない。まさしく否定的なことを言われてきたことで自分には夢を叶える力がない。無理なんだと現実的になってしまうのではないかと考える。

ちなみに、夢とは、日本の辞書では、「儚く叶わないもの」と書いているが、海外の辞書には、「強く願えば叶うもの」と書いている。このように場所によって文化は違うものであり、それならば、NPO法人では、我々大人が14万8000回、「あなたならできるよ」と言ってあげることで、子どもたちは、何にでもなれるのではないかという思いから活動を始めた。

街頭での夢アンケートでわかったことは、子どもたちはみんな夢を持っているが、日常的に夢について語る場所がないということである。「初めて言った」という子どもが結構いた。そして、その夢はいつの間にか職業に変わり、夢の素は身近にいる輝いている大人だということである。我々の活動の根底には、そういった子どもたちの夢を応援する社会にしたいということがある。

子ども食堂を利用した子どもの事例を紹介する。1つは、小学生の頃、毎週水曜日に来て勉強したり、遊んだりしていた女の子は、高校生になった今、ボランティアとして参加したいと言ってきてくれた。自分が楽しかった思いを今の小学生にもしてもらいたいと思ってくれている。別の男の子は、小学4年生の時に「スタッフしてもいいですか。」と言ってきた。子どもスタッフリーダーになってもらうと、どんどん積極的に活動しだし、お祭りイベントの時には自らブース出店の企画を出してきた。中学3年生の時には、自らキャンプを企画し、大学生ボランティアを集め、60人で室戸でのキャンプを行った。その子は、高校1年でNPO法人を立ち上げ、今も活動を続けている。また、別の女の子は、小学生の時に引っ越して来たということもあって、学校にうまく馴染めず不登校気味であった。初めて来た頃は、包丁も使ったことがなかったのだが、回数を重ねていくうちに積極的になり、スタッフとして調理なども行うようになった。高校生になってからも「何か手伝うことない？」とキャンプなどのスタッフとして活躍をしている。

他にも「ハローサンタプロジェクト」という一人親家庭への訪問を行っている。大変好評で、自分もNPO法人でボランティアをしたいという子どもが出るようになった。

最後にまとめとして、どのような若者に育んでいくかについては、いろんな能力をつけてもらいたいと思う。そして、地域のために活動してほしいという気持ちはあるが、自分にとって損か得かではなく、自分の人生にとって何が大切なのか自らの力で知り、選択して行動できる力を養ってほしいと思う。

どんな環境があるとよいかについては、何かしたいと思ったときにつなぎ、無理だと思うことも実現に向け、後押しする環境が必要だと考える。そして、否定されずにチャレンジでき、子どもの思いや夢をしっかり聞くことができる環境が大事だと考える。

最後に、子どもにこうなってほしいと言える大人に私たち大人がなることが大事ではないかと思っている。大人になり、しんどいな、辛いな、生きづらいな、ではなく、こういう世の中だからこそ、どうやったら楽しくできるか、輝いていけるかというのを実践している大人の姿を見て、子どもたちが興味を持ってくれたらしめたものだと思う。そして、子どもを子どもとしてではなく、一人の人として正直に礼節を持って接していくことが大事だと思っている。

【意見交換】

委員１の発表について

（委員）

青年団協議会の人数が減っているという話があったが、どんな理由があるのか。

（委員１）

初期の頃の理由は、自家用車が普及したことや趣味の多様化によって、かつての若い世代の娯楽だった地元での集まりや地域の祭りなどから離れていったこと。

現在は、活躍する場がなくなってきていることが一番の理由だと考える。例えば、成人式は以前はその地域の青年団が段取っていたが、今は市町村の教育委員会が行っている。

（委員）

若者たちが意欲的な活動をしていく上で、継続的に集まることが大切であると感じた。そうすることで、人の良さが分かり、共ににやろうという意欲につながる。

また、若者たちの活動が単に自分たちのやりたいことではなく、地域の活性化につながっていくような仕掛けづくりも大切である。

そして、大学等で地域教育を学んだことが実践として実際に地域で活かされることで、楽しみが生まれる。また、地域の婦人会や老人会などの他の団体と一緒に活動し、他団体から肯定的な評価をされる機会をつくることで、若者がいきいきと活躍できる場になると感じた。

（委員）

これだけの活動をしていることが、多くの県民に知られていないことがもったいない。熱意をもって活動している姿や断られても諦めない姿を青年団が示していくことで、県や市町村、企業などのバックアップへとつなげていけるのではないか。メディアに向けてもプレスリリースをするなど、積極的に取り上げてもらうことも大事。

また、今の若者の状態に合わせて、まずはSNS等を使ったオンラインでのつながりづくりから始めて、そこから対面での活動につなげていくなどの方法もあるのではないか。

（委員１）

様々な場面で社会教育という言葉や青年団の活動を発信する努力はしているが、活動の成果を数値で示すことが難しいことや、メディアの取材を受けても青年団と関係ない部分のみ取り上げられてしまうことなどがあり、発信の仕方については長年模索している。

委員２の発表について

（委員）

高知市の地域おこし学校は地域外の方が中心だと聞いている。地元の方の意見の吸い上げはどのようにしているのか。

（委員２）

自分たちの楽しみとして集まっている方が多く、地域の活性化に興味を持っている方があまり呼び込めていない、また、開校当初から比べて参加者も減っており、課題となっている。

（委員）

委員２、委員１にお聞きしたい。地域の方のやりたい事などを吸い上げるときに、時間や資金が限られている中で、何を基準に選んでいるのか。

（委員２）

高知市沿岸部では南海地震のリスクが地域の課題であることから、防災アウトドア教室を行っている。個人の趣味の範囲のものよりは、社会的な背景を内包させるようにしている。

（委員）

メディアとの関わりで、取材等を受けたときにこちらの思いとは全く違う取り上げられ方となり、効果的でない結果となる場合などもあると思うが、フィルムツーリズムにおいて、制作会社や高知市との間でそのような問題はあったか。

（委員２）

今回、自分が中に入り、互い（制作側・受け入れ側）の意思疎通をスムーズに進行できるように尽力した。映画制作のプロと行政を繋ぐには、共通言語を理解する必要性があった。地方でのロケは膨大な予算が掛かるが、自治体クラウドファンディングを立ち上げ、十分な資金を調達し、映画制作はもちろんのこと、プロモーション活動をしっかり行う準備をしている。

（委員１）

自分たちが責任を持てることか、自分たちにとってもやりたいこと、利点のあることか、という基準で選んでいる。無理な要望でも一度は受け取り、自分たちにできる形での提案を返すこともある。それで折り合いがつかないこともあるが、別の機会でお誘いをするなど、関係は大事にしている。

（委員３）

自分事から始まる、という言葉があったが、自分事としてとらえてもらうための工夫などがあるか。

（委員２）

それぞれが持っている得意分野や地域に還元できるような部分を聞き取り、それを活かした教室を行っている。

（委員長）

社会的処方という考え方を若者の活躍できる環境づくりにどう活用できると考えるか。

（委員２）

社会的処方は、怪我や病気のために弱い立場にある方を対象としたものである。それを地域の課題によって弱い立場にある方と置き換えて考えている。医療に限らず行政や地域にも活かせるもので、参入も比較的しやすいものなので、推進していきたいと考えている。

委員３の発表について

（委員）

子ども食堂、子どもの居場所づくりの活動などを通じて、子どもがどのように成長していったかをもう少し聞きたい。

（委員３）

大人が手を出し過ぎずに子どもに任せていくことを大事にしている。ボランティアが多かったときには子どもたちはただ遊んでいるだけだったが、ボランティアが少なくなってきたときに子どもたちから「手伝おうか」と声をかけてくるなどの変化があった。

（委員）

将来の夢を聞くと、それを重圧に感じてしまうという子どももいると思うが、そのようなことはあったか。

（委員３）

学校や身近な大人の前では「こういう答え方をしないといけない」という先入観があって重圧を感じる子どもはいるかもしれない。街頭で夢を聞いたときには、無関係の相手だから素直に答えることができたのだと思う。また、夢はあってもなくても良いし、変わっても良いことも伝えている。

全体を通じた質問・感想等

（委員）

発表者３名に聞く。皆さんの取組の原動力や糧となったものは何か。そこから今の子どもたちや若者にどのような条件がそろえば良いのかが考えられるのではないか。

（委員１）

大人になって社会教育と関わる中で、失敗をしても受け止めてもらえる場所や人との出会いや、人の温もりに触れたことがきっかけとなり、はじめは地域のことなどに興味を持っていなかったが、必要なものだと感じるようになり、活動を続けている。

（委員２）

大学時代の恩師から、学んだことを活かせる環境が高知県にある、と勧められたこと。新しい挑戦に対して寛容な高知県の土壌。挑戦を後押ししてくれた行政、民間企業、東京の制作会社。それぞれが高知県でつながり、学んできたことや挑戦が地域に還元できる、ということが原動力となっている。

（委員３）

子どもの頃母親が愛情を持って自分を信じてくれたことが自信につながり、自分の目の前の子どもを信じる、ということにもつながっている。

また、大切な人が若くして亡くなった経験から、死ぬまでに何ができるかを考えるように

なったことが、現在の活動をはじめたきっかけとなっている。

（委員）

委員２の発表では、「小規模な公共空間づくり」という言葉が特に勉強になった。私の地域では、多くの人が集まりやすい会場だけでなく地域に出向いての講座や交流事業などを行う移動公民館の取組を行っており、その点でも大変勉強になる発表だった。

委員３の発表では、「何かをしたいと思ったときにつないでくれる」という話は、これがまさに社会教育だと感じた。また、子どもたちの居場所づくりは、自分たちが地域に愛されているという自己肯定感を育むことにつながるのだと思った。

委員１の発表では、人が集まるということに意義があり、そのような人が集まる場で「青年団」という名前や存在を伝えていくことが大事だと感じた。

【その他】

次回は、５月に行う。

３　閉会（15:55～16:00）